漢字を覚える能力は年ごとに低下する

私は、昭和35年に担任した一年生を、卒業するまで6年間に亘って担任しました。私はこの子供たちにも「社会で漢字表記をしてある言葉は総て漢字で表記し、決してかな書きしない」といふ石井方式の基本原則に従って指導しましたから、1年生が一番数多くの漢字を学習し、学年が進むにつれてその数が減って行きました。

6年生の学習漢字は、1年生の時の3分の1にも足りない程なのに、その習得に苦しんでおりました。同じ子供たちを6年間通して指導してみても、漢字を覚える能力は1年生の時が最も高く、その能力は年ごとに低下して行くことにはっきりと観て取りました。

丁度その頃、大脳生理学で有名な時実利彦先生とお話をする機会があり、この話を申上げた所、「丸暗記する能力は、生後の3年間で最も高く、三歳を過ぎたら低下する一方だと言へると思ひます。だから、漢字の学習においてもさういふ結果になるのは、私も当然だと思ひます」といふ事でした。

1年生が6年生と馳けっこしたら、1年生が負けるに決っておます。また、1年生が6年生と角力すもうをしたら、やはり1年生が負けるに決っておます。

だから、「何を競争したって、1年生は6年生に負けるに決っておる」と、誰だってさう思ふに違ひありません。私もさう思つておりました。それで、漢字を覚える能力も、1年生が一番低く、その能力は学年が進むにつれて高くなる、と思つておりました。所が、事實はその正反対でした。

この事實の体験に依り、「教育の基本にかかわる重大な問題を、ただ感覚だけに頼つて判断し決定する事は実に危険である」といふ事を深く痛感しました。判り切つたと思ふ事でも実践し検証する必要があるのです。

私はこの事實を発見すると、直に世に発表して、一日も早くこの事實に沿つた漢字教育をするやうにと呼び掛けました。然し、何の反応もありませんでした。教育界の反応の鈍いことについては、十分に体験済みでしたから落胆はしませんでした。

然し、能力の高い時に負担が軽くて、能力が低下するにつれて負担が重くなる漢字教育を受けておる子供たちの事を思ふと、暗然たる気持にならざるを得ませんでした。

こんな見当違ひの漢字教育を続けておる限り、教科書が満足に読めない子供が多く出るのは当たり前です。教科書が満足に読めなくて楽しい学習が出来ないわけはありません。そこから登校拒否する子や非行少年少女が生れるのです。

半ば諦めておりました所、“初めに”で述べましたやうに、平成4年度から施行されることになった新指導要領で、今まで高学年に配当されてきた漢字が大幅に低学年に移されました。その結果、3年生・4年生に最も多くの漢字が配当され、5年・6年と逐次配当漢字が減っております。まだまだとても十分な配当とは言へませんが、これでいくらか「能力の低下につれて負担が軽くなった」ことにはなります。

文部省のする事ですから、そんなに大きな変革は望めません。今度の改訂の範囲が精一杯の変革だと思ひます。だから、まだまだ不十分だと思ふ一方で、「よくぞここまで改訂してくれた」と文部省に感謝したい気持ちがあります。